俳句必用作譜

瓢子種

ふくべのしね

全

酔裏乾坤大

泊堂

農家の稗を[illegible]
米をとりて[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の乗報を採て

世の黄氏家よりきつけて法ちゑひ
[illegible]
秋[illegible]
[illegible]
[illegible]

明治丁亥孟夏
[illegible]

凡例

一宗匠家ハ立机披露順次ニ據リ掲ケタレハ之レヲ席順ト知リ賜フヘシ

一遊俳家ハ吟詠投寄ノ遲速ニ因リ順次ト載セリ

一現今出評多キ遊俳家ハ特ニ四時ノ吟詠ヲ載セテ風調ヲ知ルノ一助トナス

一冊尾ニ宗匠家遊俳家ノ戀句ヲ掲ケ作例ニ便ナラシム

一坂地及他邦遊俳諸君ニシテ本冊刊行后投詠セラレタル分ハ他日増加編纂スヘシ

俳家瓢之種

梅邨彦七編輯

❀桃青靈神

北枝 翠臺 — 希因 碁柳舍

闌更 芭蕉堂 — 漫々 黄揚門 雪樵 — 米中 竹之本

景色　不二
旅体　悟り
酒興　滑稽
愛情　子
草花採り
他の季結び

天王寺村大江神社坂ノ下南東角　竹之本　竹川氏

水に陰移す胡蝶の輕みかな　米中
寐顔見て着せて退きけり枕帽子
虫鳴や阿部野に寂る小町塚
次の間へ燥の洩るゝ炭火かな

桃青霊神

桃妖（桃枝齋）　桃居（不二庵）

鶴翁（桂亭　田鶴樹男）　不角（不二庵　前桂亭ト云）

る〜　猫

けり止メ

て止メ

東區本町通り中橋筋南へ入　不二庵　桂　氏

長居して花の明りを覺へけり　不角

垣とせは隣のものよ蝸牛、

行先の村は暮るゝに蕎麥の花、

寒菊や客を見かけて庭も掃、

桃青霊神

桃妖　桃居

奇淵（菅氏　大黒庵　叙法眼）　鼎左（花屋庵）　其濤（秋津庵　前一鷗亭ト云）

孝行　吉野山

不二　齡ひ

赤々　處

只あらず

須磨浦

古歌　變体

らし

東區南農人町壹丁目四番地　秋津庵　西　氏

持前の名と白魚を眺けり　其濤

打水をせよと湯に入る主かな、

灯に虫の來ぬ夜と成て虫の聲、

柳よりあくて氣易し雪の家、

桃青靈神

北枝　希因

闌更 南無庵　素信 梅室　休叟 半靜庵

其逸 舊柏靜庵

隈　輕し

河內國丹南郡大保村　半靜庵　若松氏

若鮎や樹の蔭潛る瀨のはやみ　其逸

活さして足葉剪すや杜つはた　〃

見る內に遠くありけり月の雲　〃

松風や氷のうへのはしり水　〃

總て句の意淡薄雅味をとのむ

桃青靈神

桃妖　桃居 不二庵

升六 翁堂 正風道場 黃華庵 島陌叟

夜來 翁堂 微雨氏 微雨舍　瓢六 翁堂 吐屑改名

翠竹 成龍庵

御代　千代
幾世　雲
齡ひ　不二
鶴　重み
輕し　淸し
水邊　光
氣色
宇栞り有レ作

西區新町北通貳丁目四番地　成龍庵　那須氏

雲水に翠りをかいす柳かな　翠竹

五月雨てけふも名のみや不二の山　〃

月澄や野に掛捨し桔槔　〃

移り行鶴の輪かけや冬至梅　〃

桃青靈神　桃妖　桃居（不二庵）

升六（黄華庵　正風道場）　白涯（黄華庵）　南齡（黄華庵）

島山　連哥
茶事　碁
庵り　只ならず
須磨浦　潦
ぶり　金屏風
詠め　吉野山
露　雫
疾起て

東區上本町通元八丁目　黄華庵　得田氏

島山や小松交りに梅の花　南齡

初蚊帳宵寐せはやと思ひけり、

草の戸も名月ふりよ明はなし、

行年や柳もらへは梅ほしき、

桃青靈神　桃妖　桃居（不二庵）

升六（翁堂）　夜來（翁堂　微雨舍）　瓢六（翁堂）

竹窓（微雨舍）

竹笹のるゐ
幽韻の体
孝悌の眞

河内國澁川郡正覺寺村　微雨舍　木村氏

垣越に能き梅見たり機の音　竹窓

らく〳〵と坂ひとつ越す茂り哉、

とうろきやほろ〳〵落る壁の土、

川端の榎は疲せて月寒し、

桃青靈神　其角（寶晋齋）　淡々（半時庵）

舍樗（深茂亭）　木僊（五竹庵）　殘夢（樗堂）

稲處（樗庵）

牛子供

程の字　咄し

人情等見た儘に

工みになき句

淡薄にして正風

の句体と好む

西京楾馬場

蛸藥師上ル

樗庵　岸田氏

陽炎や今汲入れし手水鉢　稲處

筍や竹に成のは拾そたち　〃

闇の音とは思はれぬ礎かな　〃

羽織にも綿入させて冬構　〃

其角翁

駝岳（八千房　后更五竹庵　木仙）　淡々（半時庵）　舍樗（深茂亭　堀氏　後更八千房）

其山（八千房　始木仙庵）　屋烏（八千房　始白也苑）　淡叟（八千房　津氏　始一肖）

肖年（八千房）　流美（八千房）

西區中之島

出簑橋南入

八千房　間野氏

見て居ても去れぬ接木の手際哉　流美

夕立は晴けり烏は寐にかへる　〃

眼にたつや踊り浴衣の昔し風俗　〃

月花におしみかさねて雪の宿　〃

桃青靈神

北枝　希因

關東

樗堂 二疊庵　桃室 二疊庵

桃兮 二疊庵　風虎 嘯月庵

忠孝　心　　西區江戸堀北通壹丁目廿五番地　嘯月庵　黑川氏

包み　情　愛

懸合せ　鼓

限りあき　地名

人情

水に迄翠り深める柳かな　風虎

知らす間に十日の菊や郭公　〃

花ぢらは落るを厭ふに月の雲　〃

櫻かも知らねと淋し冬木立　〃

桃青靈神

桃妖　桃居 不二庵

奇淵 菅氏 大黑庵 叙法眼　照海 夜白園

堺甲斐町東三町　夜白園　須藤氏

預た子に草臥る花見哉　照海

宿かして主は寢るや郭公　〃

水音は兎鼓よ萩の中　〃

懷の金に汗かく枯野かな　〃

貞德霊神

貞室 一嚢軒 ― 貞因 永田氏

貞峨 貞因二男 叙法橋 ― 田鶴樹 淺見氏 句星庵 叙法橋 ― 左逸 反古庵 舊号春秋園

天來 反古庵 ― 龜樂 反古庵 ― 雅友 反古庵

都鴉老 留主佛夢 念佛磯兩 物鶏 一より十迄數字 他の季結ひ 詫しき躰

東區高麗橋東詰東入 反古庵 小西氏

寒食や竈の上に鶏の糞　雅友

庵の留主竹夫人のみ殘りけり　〃

替てから新に涼し井戸の水　〃

爽るや又一玄きりたゝの雨　〃

桃青霊神

桃妖 ― 希因

桃居 ― 桃序 ― 樗堂

桐栖 ― 桃室 二疊庵 ― 鶯室 九竹園

文鳳 二世九竹園

茶柳窓 西京間之町通御池北入 九竹園 益井氏

梅咲てにほはぬ若菜わひぬ飛し　文鳳

みしか夜も心得顔よ峰の松　〃

糠味噌のあるゝ夜ところそ蟋蟀　〃

囉ふたる墨こゝろみて冬籠　〃

桃青靈神　桃妖　桃居 不二庵

升六 翁堂 正風道場 黄華庵　夜來 翁堂 微雨舍　瓢六 翁堂 吐居改名

瓢也 翁堂

南區長堀橋通清水町南入　翁堂神戸氏

寂体
人情　戀氣
腰簑　蟹

元日やおとたり初めの一眠り　瓢也
蓮の香の上に莨の煙り哉　〃
夕榮の景色あかへそ秋の山　〃
鰒汁のぬくみもるゝや壁の穴　〃

桃青靈神　桃妖　桃居 不二庵 別号三四房

梅後 三四房　扇暑 三四房　兎逓 三四房

英風 三四房　右三四房兎逓沒后一鴎亭其濤預ル事 數年明治八年門人英風ニ爲授号

東區松屋町筋農人橋通南入　三四房　山田氏

初鶏や鳴と思へは待遠き　英風
さゝ濁りする夕立の野川哉　〃
不二産た凹みにすむや江鮭　〃
時雨したやうには見へす山の月　〃

桃青靈神

桃妖 — 桃居

井眉 — 眉山 — 鼎居 前一水庵荷村繼花屋庵前号男ニ譲

荷村 号一水庵前井圃庵荷實ト呼

一水庵 丹羽氏

南區難波新地二番町三番地

桔槔 闇

千種 盈す

浮雲し 兆す

震 飜

澪標

中のや切れ

かせ風て見るや柳の長みしか 荷村

着た當座襷のあまる袷かな 〃

山そひや片われ月の水移り 〃

橋守や千鳥にはかる夜の深み 〃

桃青靈神

桃妖 — 桃居 不二庵

奇淵 大黒庵 — 松隣 大黒庵 — 鼎淵 大黒庵

大黒庵 川合氏

桃青霊神

桃妖 — 桃居

升六 — 白涯 — 南齡

雅笑 閑華堂

東區西新瓦屋町十二番地 閑華堂 藤田氏

高砂の松い目出度し謠初め 雅笑

五月雨や靄の中もく道案内 、

夕くれや松風止んてきぬ〳〵す 、

子に耻ぬ咄しも出たり年忘れ 、

桃青霊神

桃妖 — 桃居 不二庵

鶴翁 桂亭 田鶴樹男 — 不角 不二庵 前桂亭ト云 — 竹圃 桂亭

南區三ッ寺筋 浪花橋南東角 桂亭 富松氏

春わかし深山も雪の白かさね 竹圃

宿り樹の櫻もかしき四月かな 、

月二ッ擔ふてもくや水もらひ 、

初しくれ庭樹に露の置しほと 、

雪の花

悟道

人情

旅兒

桃青靈神　桃妖　桃居　不二庵

鶴翁　不角　形外　松隣庵

西區本田通一丁目三番地　松隣庵　田中氏

桃青靈神　桃妖　桃居　不二庵

升六　夜來　瓢六

九華　松風軒

春山の梅
夏の朝道
秋の夕暮
冬の閑居

南區鰻谷御堂筋南入　松風軒　菊池氏

梅咲や日毎に太る瀧の音　九華
短夜の足しにおろすや駕のたれ　〃
聞外す夕暮もおし秋の鐘　〃
冬の日や碓ふみたらぬ水車　〃

桃青靈神

桃妖　桃居 不二庵

鶴翁 桂亭 田鶴樹男

不角 不二庵　芳里 白雲舍

雲錦
雨風
音

南區難波新地四番町廿四番地　白雲舍　岸氏

神路山にて
青東風や千年をわとく杉の下　芳里

鈴鹿山にて
五月雨や飴もあかるゝ蟹か阪、

朝顔の夕咲を見る九月かな、

啼千鳥風にも骨の有る夜かな、

風流をあまんし翁の門よ入
引立紹介竹の本

南區東堀清水町筋濱南入　千艸園　小林氏

萬國へ光る皇國の麗かな　蟻道

あき風に花はもれつゝ白牡丹、

凡しに吹かれつ松の葉の黒み、

濃き薄き色や紅葉の蔭日南、

桃青霊神　桃妖　桃居

升六　夜來　瓢六

瓢也　翁堂　晴月　松濤舍

摂津國三宅村　松濤舍　中井氏

降くるゝ中にも見もる彌生哉　晴月

さつかりし雨の重みや田植笠　、

汐のるや草になきやむ磯の虫　、

野けしきや鶴も居おり暮る年　、

桃青霊神　桃妖　桃居　不二庵

井眉　眉山　荷村　前一水庵　花屋庵　鼎居ト改

水泉　井圃庵

南區道頓堀西櫓町十三番地　井圃庵　岡本氏

吹送る風の案内や梅の道　水泉

思ひかけ有てめつらし郭公　、

橋越せゝよりの道のなる芒哉　、

梅にさす日影に冬のもとり哉　、

桃青靈神

桃妖　桃居（不二庵）

井眉（井眉庵　五春荘）　井資（井眉庵）　五春（五春庵）

南區大寶寺町中之町七十五番地　五春庵　香川氏

鍬はしめ梅つくろふて戻りけり　五春

一寸出す茶にも氣のある牡丹哉　〃

思ふほど寒うも住す露の家　〃

山里や雪の戸明けて藁きぬた　〃

桃青靈神

桃妖　桃居

升六　夜來　瓢六（翁堂）

花航（舊弄月庵）

南區大寶寺町浪花橋筋南入　旭庵　佐藤氏

人情　戀

鋏　藁家

橋　船

寂ある景色

橋の無い處は船ありはるの川　花航

水もまた寐ぬ音のしてほと〻きす　〃

甘干や風も日もすく釣ところ　〃

途中から戻りし下戸の雪見哉　〃

●桃青靈神　桃妖　桃居 不二庵

鶴翁　不角　形外 千秋園

雅俗深味の風
諷を佗しき作
意に好む

但馬國生野銀山　千秋園　和田氏

東山にて塔二重殘して鐘の霞みけり　形外

夏痩や更て月さすひさ頭　〃

庵佗し疊の上の秋の風　〃

夜にうつる用意も見へす雪の人　〃

●桃青靈神　桃妖　桃居 不二庵

鶴翁　不角　蒼露 桃陰居

けり止め　中の哉

一つ二つ　龜

かへし詞　虫類

殊勝なる作
大なる物を小さく言廻したる句

東區安土町二丁目廿二番地　桃陰居　出田氏

とも移りして明行や花と水　蒼露

滴りや溪〻日あしの處〳〵　〃

汐の來る音や月まつ耳の伽　〃

傍もうつれ枯野の細流れ　〃

貞徳霊神 ― 貞室 ― 貞因

貞峨 ― 田鶴樹 ― 左逸

天來 ― 句梅 汝星庵 ― 白賀 汝星庵

哦石 汝星庵

北區天満橋筋一丁目 汝星庵 前田氏

桃青霊神 ― 桃妖 ― 桃居 不二庵

鶴翁 ― 不角 ― 一香 七種庵

西成郡難波村山之町百八十一番地 七種庵 竹村氏

撫まわす秘蔵瓢や彌生ろら 一香

ほとゝきす花も實もある初音哉 〃

初月に備はる秋のひかりかな 〃

胴ふるひせし眞上あり冬の月 〃

寂栞り 曙

風雅狙 碁

茶事 釣船

雅味 東雲

須广浦

音靜

⁂ 桃青靈神

桃妖 — 桃居

鶴翁 — 不角 — 桃雨 三千舍

神恩
名所旅
古事

西區新町通三丁目十七番地

三千舍 大槻氏

青麥や旅の日數の立やすき　桃雨

聞ふとて茶は過さぬに郭公、

並木には日影殘りて飛とんぼ、

初時雨野山の色をさましけり、

⁂ 桃青靈神

桃妖 — 桃居 不二庵

鶴翁 — 不角 — 如葉 桃園

神祇による
雲　齡ひ
御代　千代
松　諸鳥類
名所結

東區本町三丁目九番地

桃園 菊山氏

數々の道ふさきけり花のころ　如葉

船底をたゝく小涙やほと、きす、

名月や松にのみある風の音、

凡のあとにしつかや窓の月、

●桃青靈神　北枝　希因

闌更　蒼虬　芹舍

似水　北枝堂

正風
寂栞り
安らかある句の
意

東區今橋通
御靈筋東入

北枝堂　松本氏

黄鳥の宿も見て來ん初子の日　似水
子規啼や日の入るあらし山　〃
秋もこゝもくか尾花の散る小道　〃
月高し只木からしの吹つのる　〃

●祇空靈神　法策　有國

公路　馬田江　公眠　馬田江　碧中　馬田江

公年　馬田江

古哥の變体
不二須广
嵯峨旅体
水移り鐘
松柳瓢
臼人心
髭隙
油斷
我がこそ切
よ切ぬ切
久しぶり
ぬかちず
ぬかりあき

北區老松町三丁目
二十一番地

馬田江　山田氏

羽の色も白きは寒し初小蝶　公年
明る夜のまて去はしあし花うつ木　〃
寐返りて聞うしあひぬ露の音　〃
雪車の唄覺えてつらき旅路哉　〃

桃青靈神

北枝　希因

闌更　蒼虬　芹舍

春光　遠翠舍

鶴松
旭牛
酒茶
煙草

西區南堀江上通四丁目九番地　遠翠舍　松浦氏

井開は賑はふ音のはしめかな　春光

眞上とは思ひかけなしほと〻きす　〃

男色しありての草よ女郎花　〃

酔ふまては師走こゝろや年忘　〃

桃青靈神

桃妖　桃居

升六　白涯　南齡

鶴齡　仙叟庵

長命　靜
遠い　みどり
遠景色

○

東區大手通谷町東入北側　仙叟庵　森井氏

白梅やむめや間は蕗はたけ　鶴齡

何とおく夏にうつりし柳かな　〃

露に明つもに暮けり卿の家　〃

簾目や蘇鉄かもとの神無月　〃

桃青霊神 ― 桃妖 ― 桃居

升六 ― 白涯 ― 南齡

松翠 石溪庵

笛 童
釣 船
尖

南區瓦屋町四番丁二十八番地 石溪庵 加納氏

奇麗好きはかり揃ふか靈所　松翠

うつくしき葉裏隠れや初茄子、

名月の雫玄そうあひかりかな、

見積りて近道ぬける枯野哉、

桃青霊神 ― 桃妖 ― 桃居

奇淵 ― 鼎左 ― 其濤

其洲 一鷗亭

不二　松
來る　見る
水邊　景色
哉止めの句作

東區　一鷗亭 石川氏

菜の花の風に春の香送りけり　其洲

短夜を長う待けるほとゝきす、

吹つのる荻の途絶や涙の音、

切れさうな風吹霜の月夜哉、

桃青靈神 ― 北枝 ― 希因

闌更 ― 素信 ― 鶯宿 此花庵

左牛 鶯宿

みの虫　牛

椎

朝氣の類

東區高麗橋通
浪花橋西入北側

鶯宿　和田氏

鶯や寐さめ莫の煙りさき　左牛

椎よりもたのむ柳や夏の夕　〃

きり〳〵す星の明りの利夜かな　〃

春めいて空のくつれて時雨けり　〃

東區井池筋
北濱南入西側

風雅房　柾　兮

桃青靈神　北枝　希因
闌更　樗堂　桃室
桃兮　梅枝　寸松庵

忠孝　靜
潤　子孫
須广　何
忘　水邊

東區伏見町
淀屋橋西入北側　寸松庵　鳥山氏

うつくしゝ流れ抱へて椿垣　梅枝
橋潜る柴船早し時鳥、
夕暮や稲こく家の笑ひ聲、
行人を見て立雪の舍り哉、

其角翁　淡々　舍樗
駝岳　屋鳥　淡叟
其山　肖年　流美
甃石　寶井庵

北區中之島
常安橋北詰　寶井庵　吉井氏

新年や床のかさりは昔しめく　甃石
涯花橋にて
舟の灯は風を誘ふか夕すゝみ、
萩の戸や箒とらぬも馳走らし、
雪散るや名さへもかしき梅ヶ辻、

桃青靈神　北枝　希因

闌更　素信　休叟

其逸　佳友　靜葎堂別号桂山人

堺區戎之町二十六番地　靜葎堂　肥田氏

鶴榮徐

防風や冠りし涙を葉の雫　佳友

半部袖

短夜も永し宿直のはつ勤め、

堆き戀句

露の戸や神事の曠に錆る牛、

孝行薫る

宮奴の油斷を嵩む落葉かな、

題かくし句

優美

桃青靈神　北枝　希因

闌更　樗堂　桃室

鶯室　九竹園　鶯居　花笠庵　竹延　夏翠庵

翠寂栄り

無事齡

幾窮理

保つ逞し

壽神嫁

深し未た

果報優美

堺市之町東三丁三十六番地　夏翠庵　石橋氏

花たのし酒は心の玉はゝき　竹延

薫る風通り抜けるや濕車の窓、

降る音に耳塞きたし秋の雨、

望まるゝ花の果報や室の梅、

桃青靈神 ― 北枝 ― 希因

闌更 ― 樗堂 ― 桃室 二疊庵

素桃 桃室 ― 三千雄 桃室

一題を包む句

二題を遣ひ作

嬉し　樂し

旭　鶴　戀

神祇　老人

子供　人情の作

東區伏見町中橋筋東入　桃室　井口氏

青麥やまた日にまけぬ里童へ　三千雄

涼風や人に待れてすこしつゝ　、

蒔かぬ種生へてうつくし草の花　、

思ふほど淋しふもあし冬籠　、

桃青靈神 ― 桃妖 ― 桃居

奇淵 大黒庵 叙法眼 ― 鼎左 花屋庵 桃之本 ― 梅鼎 花屋庵 舊花雨庵

鼎池 花屋庵

在所　水邊

寺院　靜

小供　無事

總て安らかな句の体

西區新町通　花屋庵　小島氏

床しさに潜れゝ藤の只長し　鼎池

あきの來ぬ物ゝ目出度し白扇　、

掃ゐけてあるや一葉の落る處　、

花ひとつさすや冬至の朝仕事　、

桃青霊神

桃妖　桃居

升六　白涯　南齢

士乙　菊翁居

伊豫國宇和島元結掛　菊翁居　松浦氏

最ふけかい笑ふてもよゝ二日哉　士乙

葉に付て乾く日もあり蝸牛　〃

誰れも居ぬやうあり庵のこほれ萩　〃

床脇へ敷かけてあり餅むしろ　〃

桃青霊神

木因　己雀

曉臺　士朗　黄山

卓志

月の霜酒壘
何の戸松風
樓

北區絹笠町十二番地　千種堂　田島氏

雲と見し梢からちあり花の雪　卓志

凉風の吹やゝ乙鳥のはしるほと　〃

樓やたゝみの上も月の霜　〃

寒聲と競ふやうあり小夜千鳥　〃

桃青靈神　桃妖　桃居（不二庵）

井眉（井眉庵　五春莊）　井資（井眉庵　二柳庵）　二柳（雨夕庵）

神　半部
公事　故事の意
茶　をばしま
ほからか　徐
樂茶碗
總て數寄屋によ
る句

南區安堂寺町
三休橋東入

雨夕庵　近藤氏

あらたまる年や神代の旦振り　二柳
百々數の古るきためしや氷貢　〃
れとりあき色香うるはし菊合　〃
綿入やまた着なしまぬ膝の嵩　〃

桃青靈神　北枝　希因

闌更　素信　必山（粟之本）

鶴歩（春園）　鶴畝（竹二庵）

畝火山　筧
鶴。村。小家
名所　地名
旅僧　小供
柏手
切字
かよつ

東區今橋壹丁目
筋南入西側

竹二庵　山本氏

膝に置手もきまゝあり謠そめ　鶴畝
姿にも似ぬ高飛ひや蚊喰鳥　〃
聞頃のひとつ殘りし砧かな　〃
ひよつかりと御室へ出たり梅探　〃

當季にて二題結ひ

フイト。モト。リント ツカ〳〵。夢 ヒヨト。ソット

東區安土町堺筋東入南側　泉園　早野氏

松山や人のイむ遲さくら　潮邊

黒羽鳥軒の釣草匂ひけり、

風流は田舍になりぬ盃をとり、

朝心ちぬも嫌し冬籠、

桃青靈神　其角　淡々

舍椁　駝岳　五木

潮水　五木庵　北叟　佳芳堂

北區天滿紅梅町柳筋角　佳芳堂　黒田氏

春風の撫て行けり三笠山　北叟

はなしやる座敷へもとる螢かな、

葺狩や常は及はぬ處まて、

柴漬や淀のわたりのさゝ濁り、

在阪　東區北濱二丁目六十六番地　無事庵　塩坪氏

美くしき作を好む

上野出て淺草のあり春の月　鶯笠

啼さすに置ぬ曇りや郭公、

初秋の風かふくあり山の陰、

客の間を隣に持し巨燵哉、

在阪　西區南堀江上通一丁目三十一番地　雪之本　上田良祖

咲滿る花や風あき朝ほらけ　露考

蟬あくや雫にたらぬ通り雨、

白雲の隱しかねたり秋の山、

夕千鳥島に風雲しくれけり、

遊俳四季集次第不同ニ記載ス

物語草子之詞意
詞舊情新
俗中雅
本歌とり
古諺の類

文久二戌年有故起續　北濱五丁目　平瀬氏
貞德靈神九世正傳　栃園蘆丸家

春雨や人香にしめる夜のもの　貞英
草垣も訪ふや螢の光君、
菊合こかねの白かね匂ひけり、
爐開や秋いきのふの初昔、

初たより
人情　寂
潛る
何かまし

瓢
景色
寂栞り
慈愛

東區安土町壹丁目　唯松庵　木原氏

見へかくれせしは此庵この櫻　安人
明易し月は眞上に有あから、
今朝譽た儘の空ありけふの月、
言の葉の匂ひ探りや冬籠、

河内茨田郡平池村　三聖館　平池氏

佐保姫や柳の糸に花衣　素香
我世とも思ふけふ哉初袷、
虫鳴や露をすり込旅硯、
押かけて來た日てはあし大晦日、

古言
俗中雅
名所
慈愛
色香

北區淀屋橋今橋通北入　窓月庵　吉田氏

親の爲子の賣歩行若菜哉　一閑
薫る風暖簾輕ふ潜りけ𝑒、
哀れ知る夕へてはおし月今宵、
懸蕚の下や雀の冬籠、

南區佐野屋橋筋大寶寺町南入　松花園　加納氏

若水や闇も嬉しき物の數　霍處
嘲越しに木深き庭の月夜哉、
澁柿や日は十分に受なから、
鞍壺に霰たまりぬ戻り馬、

不二　何事
忘るゝ　忘れぬ
人情　孝
切字に
總てたくみ有る
句作

北區此花町二丁目四十二番地　扶桑庵　山口氏

風光る中に眠るや鶯一羽　貴山
一ト聲て宜敷い時鳥、
秋の虹草木に色と移しけり、
初冬の綠り美くし大根畑、

小さい手
角力取を結し句
太皷
尋常ある作意の
類

西區京町堀上通五丁目七番地　幻夢庵　今田氏

小さい手を曳て草臥る霞かな　芦丸
袷着て齒さはり輕し香の物、
秋風や鼓に去くるゝもふ雀、
覗かれて咲く隙のおし室の梅、

雲　不二
雨　夢
須广　哥
古び　松島
そも〳〵

人　色
咄し　山
海老

西區京町堀千秋橋北詰東入　琦雪庵　柳田氏

白梅やみとを斗の春あらす　秀峰
歌にして土産とありけり郭公、
柳にも松にもよらす盆の月、
梅にさへ見へぬもたんや年の暮、

西區京町堀通新難波橋東入　櫻戸室上氏

水鳥の行義に並ふ餘寒哉　都雪
海老刎て二ッに成りぬ水馬、
苔にしむ花の車や秋海棠、
丸頭巾こゝろの程も知られけり、

文明の意
須广　吉野
不二　旅体
賈き　拙ゝ
孝　慈悲愛
し切れ　よ切

北區老松町三丁目廿三番地　眞香堂　南條氏

行暮て宿も定めす花に月　聽水
水に富む里の靜かや雲の峯、
一銚子屠蘇も添たし生身魂、
庵たのし師走の文も月や花、

日　月
山　海
人　情

同　四十九番地　松花庵　北村氏

暖い日も寒い日もあり梅見月　北秀
川添や柳〳〵の木下闇、
ちゝれたる雲の寒さや后の月、
不義理さへせねは長者や大三十日、

西區阿波堀三丁目　楓下亭　八木氏

春の人須广てもつねけり　夕映
ほと丶きす　暗や明行夜の輕み　、
夕やけやよしあき秋を暮もとる　、
旅人の憂をうらやむ雪見哉　、

東區備後町四丁目　此君庵　磯矢氏

鐘　寂
景色
人情

鐘送る嵐の寒し暮の花　窓兩
夏立や朝戸の水の打心　、
快よし田はもたねとも秋日和　、
火鉢にもよらて待けり乳囉ひ　、

神代猫
孝子　忠僕
案山子　茶

南區南炭屋町五十二番地　艸眞庵　加藤氏

麗やよい山かけの涙に浮く　入道淳
温泉に染る手拭すゝく清水哉　、
八朔や案山子にすへる陰の膳　、
鰒好の目出度白髮親父かな　、

西區新町通二丁目十四番地　桂花庵　大西庄兵衛

冠の紐にもつるゝ家南樹哉　松窓
初雪は足らぬ心よ不盡の山　、
耳寒し蚊の口ゑしも利かぬ朝　、
芳野から出たるものかや櫻炭　、

梢　庭
終夜　窓
遠し　近し
隅田川

東區本町通
中橋筋南入

春梢庵　大庭氏

都鳥白し　朧の隅田川　南窓
待た程啼間ありたし時鳥　、
寐惜むや終夜月を友にして　、
何處迄を限りそ雪の國境　、

八雲琴
春　神
舊跡

東區博勞町
三休橋筋南入

春園　山本勘助

雲に入鳥見添へるや千松島　住卿
五月雨や蝸牛ふらり竹の葉に　、
神垣や未た秋あから落葉搔　、
野さらしの夢も見よとや小夜時雨　、

和泉國大鳥郡
深江村

連歌堂　外山氏

黒土と小町召されて花の宴　子儁
更科の景色はえらず海月取　、
芒賣狸にもやと思ひけり　、
金襴もにしきもあるに紙衣哉　、

古語の詞
開化の句意

堺區九間町西二丁
第二番地

花笠庵　柴谷武治郎

口土產に眉毛算まれあ狐隊　鶯郷
裾にとは野男憎し咲耶姫　、
分け入ろも身の神あらす月の雲　、
鳥雲や胡沙吹く浦は自から　、

曉　朝
衣　思
返し言葉
山　軒
世　嬉し
一つ。か。けり
し。それ

思ひ　船
佗びし　筆
瀧　夜隈
睦む

堺區宿院東一町
第七番地

朝々庵　松井辰造

欺されて來たのてゝなし遲櫻　花悅
夏の川神も渡らせたまひけり、
濡安きものは袖あり魂祭り、
羽休めの千鳥に白し沖の石、

堺區乳守丁

一丘亭　倉橋氏

皆ものは粧ふ春を木地爐緣　梅溪
ほとゝきす櫻は白湯に薰りけり、
傾ふひて目出度からるゝ案山子哉、
たしかきも心に足りて初時雨、

優りたる物は子供よ御代の春　堺　保科日新舍　無逸
新らしき物の限りや初日影　同　以呂波庵　無曲
ふみのそく故事もかし雪の暮　同　烏丸堂梅廼下如水
種紙を離れて無事お蠶かな　同　玩月庵　此友
睦ましき嫁姑のいぬたかな　同　北田靜豐庵　其遊
初釜にもてなしふりや今日の雪　同　河盛春色庵　梅庭
月涼し田は十分の株ふとり　同　三好九重庵　東山
初霜や春をすきにし竹の上　同　中見黃鳥庵　梅賀
言の葉も無盡藏あり秋の月　同　朴津操質庵　健椎
里見へて堤の長き柳かな　同　篠田柏靜庵　其兒
曲水や曉の筆とる芝のうへ　同　辻本氏　此屋
海もよし野もよし春の水移り　岸和田　保科棲遲堂　無興

また余りある朝月の光り哉　河内　兎室
よし人の見た跡にせよはつ櫻　同　不學
物いはぬ山を相手や秋のくれ　同　墨淵
とう仕ても白ゐは輕し夏衣　同　一松
蝶に眼のはあれて廣し湖の上　同　不朽
霞むのは余る景色や千松島　大和田　雨柳
見直せは雲と成けり春の不盡　同　靜々庭竹庵
白濱に夕映つくるとんほ哉　杜本　清江
涼しさや雨の遠山江の柳　兵庫　宮北桃林庵　宜遊
翌日は狩る鳥見て置や春の山　同　白川抱月庵　清風
鯛に盥するや彌生の雨催よひ　同　戸田風月庵　松園
月に眼の勞れた頃や郭公　同　八木汲古庵　芦江

塗棚に目立つ二日のほとりかな　同　白日庵　靜巴
動きなゐ御世に根つよし松の花　同　細川氏　流芳
百姓の笑顔見せるや稲の出來　神戸　河西隱島庵　行舟
明てゐる夜と思はれす月の潮　同　枝雄
半部も内外に菊と野菊かな　同　松本鶴栖園　千司
風薫る家や惜まぬ水つかひ　灘　潮石
風のため戸さゝぬ窓や夏の月　備中　齡谷
借て見る眼鏡の若し初暦　出雲　可夕
夕蟬や啼つくすかと思ふほと　伯州米子　蘭峨
弓張の月にさはるや芒の穂　在阪　道遊庵　好遊
氷る鐘聞て小さう寢る夜哉　灘　潮石
松はかりてもよし春の嵐山　同　梅屋

行春や草にせかるゝ水の音　淡路洲本松風社　小出楳旭
風はかり暮を急くか散る櫻　同　太田秋穀
時鳥曇た夜てもあかぬけり　同　太田芝石
氣安うに柳のうけて春の雪　同　德弘白洋
問ふ物は黄鳥はかり冬籠　同　阿萬海洲
落たより樹に花のある椿哉　同　日永立意
酒呑ぬ人も旅して閑古鳥　同　別所梅處
降る雨や晴て氣こゝろよゝ袷　同　福浦謹道
藪垣を廻れは見たり梅の花　同　和田蜻洲
咲藤の下に庭鳥うたひけり　同　廣田芥草
井戸端に大根白き寒さ哉　同　栗生坦々
松山は聞處あり郭公　同　謹道

川渡る馬のきけんやはつ嵐　同　洋々
桔梗からひらいて出たり今朝の秋　同　梅月
歸り花さくや旭ゝにほふ枝　阿波　朶雲
庭に松家に酒ありけふの月　同　愛山人
ふみ月もまた夕顔のもふへ哉　同　壽仙
雨降らぬ日もぬれ色の柳哉　同　有隣
かりそめに出たらしき雲時雨けり　同　冠靜
けふの菊雲井に露のこほれけり　同　青柳
冬の風木卿のいろをはなれけり　同　如鳳
ほめて摘名も數々や春の草　信濃　矢崎義碧
不足なゝ小袖の上の紙子かな　同　湖南梅濃
遲き日も暮るか鳥の寐に戻る　同　晴峰

くすりにもある味ひや蕗の薹　木曾　五重一
草木にもなほ色見もる花火哉　上州　一笑
ろの露か米になるのか稲の花　堺尻　素考
辻占も買ふて戻るや年の市　金澤　小竹
ひとつ葉をくゝりて啼や鷦鷯　信濃吟天社　千鶴
牛の角包む寒さや諏訪の冬　上諏訪　晴嵐
萬歳に膳は冷けり子供客　同
名月や夜明けに近き風通り　西山田　都麥
焚く物に富ても寒き山家哉　岩波　松年
春雨やはさみ廣けて蟹の這ふ　小川　梅布
七草や八重の拍子の板たゝみ　宮原　鳳儀
かけ樋や天窓の上をもく清水　原田　知老
露の散る音や枯梗の開く朝　後町　花潮
日の落て淋しき旅を子規　中山　梅谷
鶯や鳥屋に隣る宿の德　窪村　一舟
消し炭に陽炎たちて乾きけり　平林　珍莊
暇あ日もあくて睦月の名殘哉　横川　三松
水配りして見直すや釣しのふ　牛山　明京
手馴たる帶は短かし初布子　羽田　文里
眼の前の用事忘るゝ巨燵哉　加藤　洞月
約束の日限確かに田植かな　笠原　一乙
かけ橋に名高き鳶の紅葉哉　岩波　哥丈
指起す程あき參の日數かな　萩原　一睡
原中や暮るゝもまたて虫の聲　柳澤　柳梢
山岡　一山

衝突入に娘耻かしかりけり　山田登山
海山やはるゝ時雨よ降る時雨　浮島龜友
ほの〳〵と蓮の匂ひや起心　藤田藤元
香にたつや箒のさきの蕗の薹　林木花
落る日に照り合ふ色や秋の山　清水精風
田に蛙數に黄鳥彼岸かな　山田十寸童
空也忌や兎まれ茶煎の手向物　小口梅坐
信濃路や雪積む上の初霞　小松楓也
月雪は得かたき花の見空哉　森山滴川
山吹の影汲む澤の流れかな　小林香露
鹿鳴や心に見もる夜の山　柿澤松濤
流るゝも覺へある瀬か浮寢鳥　平野入家

信濃吟天社

稲妻や客に見らるゝやふれ窓　伊那部曉月
さま〳〵に世は移れとも菊の主　豐丘一叢
帆はしらの影置く樣や夏の月　下總長夕
うら表あき日當りや唐からし　丹波園部一螢
白菊の花にかわらぬ住居かな　同二柏
松風に聲ふせられて秋の蟬　同八十八
鐘の音も靜に思ふ夜寒かな　同暮雪
戸に鹿の角する音やそゝろ寒　同舟月
もふ來ぬと云ふ迎振りや稲雀　同松琴
水音の聞へてふかき茂りかな　馬關烏曉
雪みそれ空も師走と成りにけり　尾道李瓶
年禮に尋に來たり旅あしみ　越前玉水

元末も今宵見られて天の川　生野　隨甫
譽やうをほめる牡丹のあるし哉　立田　車六
旅すれは足元よりろ秋の暮　西京　月家　柳
ほろ〳〵と梅も散るなり涅槃の日　同　旭水
夏待や坐敷にかけし白扇　同　金鐘
列の花やいつ夜の明て鳥の聲　同　壺中
ふり賣の竹の子長し雨上り　同　松曉
松の蟬簾ゐろせは時雨けり　同　荷章
また籠は沖の雫やはつ鰹　同　松月
涼しさや柳につゐく洗ひ馬　同　梅屋
一月や苔と〳〵ろの新扇　同　松翠
餅搗やもふ一日に際の入る　同　梅皐

川せまし草摺る舟に飛蛙　同　靜起
若うゐる藥買たし年の市　同　其石
火のし置跡のぬくみや冬の蠅　同　長水
振て見て寒からせけり酒德利　同　壺中
初夢に見て未た知らす不二の山　ナニハ久寶社　根來日昇軒　東屋
こゝろよき御代の詠めや稻の花　同　今西八朔庵　素月
野も山も皆いちやふの錦かな　同　岩井日々庵　曉烏
餅搗て今年も無事に祝ひけり　同　岡本清好庵　梅風
初夢の喧去て居る親子哉　同　大庭大九亭　友九
曇りなき家の清めや鏡もち　同　田淵蕉落庵　可詳
春とともに越もく旅や大井川　同　根來登際軒　花集
猫に迄さす精進や御霜月　同　長谷川長閑舍照里

のそき屋て見る極樂の彼岸かな　ナニハ　久寶社　河合千歳庵　松溪
花摘や片褄高き女連れ　同　中村青々堂　蒔生
三芳野にまさる詠めや花衣　同　中川氏芦月
弼に花咲せて齊祝ひけり　同　根來松月庵　昇甫
須广の秋心に足りて戻りけり　浪花　胡蝶
松一木見へて廣野の霞哉　同　井上春園庵　眉英
鶯すむや蓬萊うつる池の面　同　雨盈庵　流溪
染たらぬ葉から暮行紅葉哉　同　松乃家　梅河
袴着や家に備る身のこなし　同　此晴
葛水や紀あたりは旅の花　同　五菖堂　不乙
梅ヶ香を抱へて戰く柳かな　同　實城芦之本　泥水
寒梅や風にもまれし花の皺　同　南翠

目去るしの松見てをりる清水哉　浪花　近藤小竹園　義琴
あと口を袖てかこふや唐からし　同　林　秋松庵　半眠
歸る广月徐ふ夜ふりけり　同　篠崎窓月庵　藤可
鶯や雨の山路も氣の晴るゝ　同　中條青竹庵大閑女
初花や春遲からす早からす　同　伊藤古池庵　荷居
秋はまた秋の人あり東山　同　幸朝
世は爰そ山は千本の花日和　同　青山今宮庵　不聞
梅見もる斗りに渡る小川哉　同　鈴木氏眉八
蓮咲や宵に去て置炭手前　同　其貫
樹に草に恥しぬ錦や唐からし　同　勝人
賑わしき門や乙鳥の幾出入　同　蒼映
今落た一葉におくや濡れ硯　同　里島

浪花津や梅からうつる春の色　浪花　松室　泰燕
咲までの花にい雨の待れけり　同　小山首尾庵　春芳
夢心聞たし花に眠る蝶　同　夕雅
爐塞や袷も着たき心もち　同　御風
算盤にこはす笑顔や店卸　同　雷遊
春雨や一村はみな藁きぬた　同　都春
口切やたしなき花の挾み屑　同　文會堂　鼎雪
蓮の葉の上行舟や五月雨　同　琴風園　竹仙
新らしき橋の匂ふや春の月　同　金水
雪は降盡して清し朝の雲　同　鼎右
散る憂きの無くて尊し年の花　同　新町　鳳尾
山里に似た夜もなるや庵の秋　同　冬人

庸軒の年の咄しや菊の主　浪花　鹿人
牛の尾に打るゝまいろ秋の蝶　同　錢人
塗膳に明る夜影や初からす　同　花人
菊柴のわすれ香高し初しくれ　同　唯人
虫時雨なかつき寒う思ひけり　同　春人
月朧鳴も啼かと思ひけり　同　小部氏　陸
庚申の夜や聞はつす蜀魂　同　雪輪家　巴
雲に入鳥も餘波や松浦かた　同　宇都保庵　海石
茶の花や蒐のあそふ畑日和　同　宇治園茶屋
山吹や氣遣ふて汲流れ水　同　皎雪庵　梅丈
去年今年摺れあふ聲や祇園町　同　九角
蟹までか染る流れや散る紅葉　同　安部枯木庵　烏秋

憎からぬ櫻の塵りや膝の上　浪花　井澤米室庵　梅秀
雛子啼やこんと開けし道乍ら　同　前野梅笠庵　春律
蚤の苦も去らぬ新らたな世帶哉　同　杉本松尾庵　霍夫
遠眠には沖の塵りなり鯨船　同　田中凌風亭　竹翠
朝顔や見し苔より殖て咲　同　南地　竹馬
日の伸る心にためす接木哉　同　青柳舍　可靜
底かする茶箱棗めや郭公　同　箸尾氏　杉壺
香の深み包みて梅のつほみ哉　同　野村春樹庵　柳花
伸るほと風にはかるき柳かな　同　香蘭堂
涼しひと母誘引出す戸口哉　同　可交
秋の暮鮪に道をきられけり　同　三好
灯ともして早う夜にする寒かな　同　南秀

哥屑を紙捻によりて春惜む　浪花　鬼斗
行違ふ袖に師走の嵐かな　同　一兆
親しみの膝進めあふ火鉢哉　同　道人
日和ほめ〳〵引大根かな　同　靜流溪龜遊
御忌の鐘眠りし山を起しけり　同　翠庵　芦潮
積柴のかはく匂ひや春の風　同　江南舍　梅守
艸薙の咄し去て行燒野かな　同　琴雅
茂りより上に音なり塔の雨　同　化笑
祝草梅の垣根て揃ひけり　同　松人
碁の友と吉野へ立て日の永し　同　雅阜
刈もるむ鎌の目くきや豐の稻　同　無學
酴醾漉や下駄のはな緒も竹の皮　同　有無庵　貞芦

月涼し松は隣の物なから　浪花　清嘯庵嶺月
初霞引や竈の朝ともし　同　月人
酒呑ぬ人にまねらす火鉢かな　同　西魚
先無事に秋も納めて里神樂　同　露玉
蚤まけや一夜に八起七ころひ　同　米洲
煤掃やよこれぬ人の氣草臥　同　松旭
花兆す樹に響きけりひかん鐘　同　水月庵荷少
見渡せは野も山もなし平ら雪　同　友仙堂梅圃
新らしふ柳詠めて初御空　同　竹人
朝茶煎く船のけむりや歸る鴈　同　南枝亭鶴静
空に舞ふ鶴に日のさす時雨かな　同　南圃
山茶花や工まぬ庭の寂栞り　同　清嘯庵嶺月

籠馴し鳥なはれなり放生會　浪花　作三
我ゝ似た物ひとつなり古暦　同　花濤
壷摘なから來た道尋ねけり　同　静江
音せぬや翌日驚す夜の雪　同　嘯虎
古茶の香や昨日は今日の一昔　同　松廼舍昌
宿取て困つた雪を詠めけり　同　虎月
若艸や船の付場のよき處　備前　南塘
とちらから見ても道なし雪の庵　同　園人
留主らしき灯の置所や夏の月　讃岐　耕雲
凧や唯眞白な不盡の山　紀伊　柳渚
數道や此鶯子鳴は拾ひ物　同　壽泉
斯すれは不二もかくるゝ扇哉　伊豫　太丸

折に火の見もるや雪の芦間舟　伊豫　竹屋
待鳥のことはわすれて夏の月　同　風枝
雨一日火鉢かゝえて暮しけり　同　文齡
梅咲たあとは櫻の世ありけり　同　石翁
あたゝかな音や鳴門の追り汐　同　几巵
名月や都に更る山の影　同　煤室
牛叱る顔も見へぬや壬生念佛　同　士乙
松風に琴をゝらゑて月涼し　同　陶然舍松琴
掃よせて見て驚きし落葉かな　同　南濤
紅梅や蝶舞出せは花のちる　播磨　麥門
怒り出す蜂や巣に洩る軒の雨　同　芋の子
山里や花をうしろに鍬遣ひ　同　麥酒

花寒う見もる月夜の茶の木哉　播磨　文里
雲井迄豐の匂ひぬ新嘗會　同　鏡花
風音も水音もあし雪の朝　豐後　可笑
笋や折角結ふた垣の外　同　竹葉
浪音い絶す夜長しかゝり舟　同　月素
秋いとゝ淋しき暮と虫の聲　出雲　敬賀
冬の山高きは白う成にけり　同　双鶴
あい箸の物に味ある清水かな　東京　步舟
白菊や眼鏡つかれの捨ところ　在阪　龍水
竹廻り〳〵昇るやかたつふり　武藏　玉川居
米持て虫聞宿にとまりけり　因播　水哉
十六夜やけふから秋もうしろかけ　美濃　魯仙

起されて聞はあらしや時鳥　近江　琴飛
置替る雲や四月のあらし山　同　竹甫
馬洗ふ間に買て來る新酒かな　大和　豐水
また月は高い〳〵と踊りけり　伊賀　早乙女
湯あかりはいつもよいのに初袷　安藝　三車
濡色に朝日昇るや露の原　西宮　半窓
白瀧の御名に涼ゝ社かな　富田　鶴聲
夜水とる人聲高し夏の月　同　太山
祇園會や埃りの中の綾にしき　同　花玉
張かへる神樂太鼓や神の留主　同　芳水
松風ハ釜にもつりて雪の庵　同　蓬塢
身震ふて起行鹿や朝紅葉　同　友山

笘一重頼に寐るや雪の船　富田　三峰
人聲に鳥の立けり朝さくら　同　可瓢
風月に親し柳はかれてまて　同　三砂
人もこの愛の持たし雛の顔　同　一聲
試に着て其まゝの頭巾かな　同　柳丈
鶏に諷われて居る躍り哉　南地樂友社　笠盃舎　猩々
濱添や麥畑にも行々子　同　秀佳
白菊に置白露の光りかな　同　化升
神垣の花や年毎咲誇へ　同　竹后
如意輪の頬杖淋し閑古鳥　同　黑坊
もき有てなほ靜かなり明の春　同　狸升
提灯を覗ひては行枯野かな　同　梅丈

縫ひけの重たそふなる袷かな　南地樂友社　斗高
下戸はまたゑらぬ味あり走り鰹　同　手枕
水の音千鳥の聲や高瀬舟　同　其騰
尊さに心澄切る神樂かな　奈良發啓社　醉花庵　眠雲
のつと出た月朧あり花の上　同　傲霜園　香樵
夕月や花に嘶くつなき馬　同　岡山流霞
片袖をくはへて雛の給仕哉　同　雲水堂　可來
蝶飛や野に物ほしき在所道　同　超橋齋　柳泉
濃き薄きかすみの果や不二の山　同　常盤庵　五葉
鳥の行方に森あり夕かすみ　同　百鳳園　一鳳
是程の香にむせもせて梅に鳥　同　香玉
求めてゝ出來ぬ景色や月と梅　同　小クラ　旭峰

嵯峨吉野見た眼に耻ぬ牡丹哉　奈良發啓社　紅白園　楳朗
柳まて屆きて消へぬ茶のけふり　五菖堂不乙
澄む空に雪の盈るゝ名の夜かな　一兆
明易き夜や酒の香の消へぬ息　木舍
月おそき宵や水鷄の走る音　素柏
箱根絶頂にて高見から見る程高し不二の山　香川　五春
鶴一羽降りて田の面の長閑かな　南地九年社　竹丈
酒の味ゑむまて苦るし青瓢　鼎立庵　松柳
紫の色は入れまし願ひ糸　浪花　北梅
半部にすれてこほすや荻のつも　同　蒼園
神風にあひく姿や糸さくら　同　喜樂
筆まめにあるも余義あし冬籠　同　荷靜

朝顔の凋まぬうちや朝茶の湯　浪花　三克
植退て見心ひろき田面かな　同　米司
鉄鉢の米とく樒の明りかな　同　八重女
盃を廻し急くや夕もみち　同　梅一
余の木にいまた春いあし梅の花　同　東洲
月の門戸さゝぬ御代の姿かな　同　錦
雪踏て來たやら低し猫の聲　同　三友
八月や花の七日に増す一夜　同　豐昇堂班虎
張かへと障子をたゝく落葉哉　同　治老
初嘴に宵寐せよとや雨の降　同　朗仙居梅宇
鳴く度に所かはるや山の鹿　同　鳴九庵精光
旭をかさす扇のほしき小春かな　同　花月庵八重一

まつしさをかくす伏家や雪の暮　生野銀山　花節女
盃へ移るさくらの匂ひかな　浪花　月花社　峯子女
朝からの小雨いの晴れて暮おそき　同　柿園　末香女
井の水にぬくみのさらぬ餘寒かな　同　遊芳庵　醉花
寐るとても常の夜てあし雨の月　同　萬松堂　萬松
稲の秋宇治いの茶のみと思しに　同　守一庵　拾果
日直りて山風さむき紅葉かな　同　伸茂亭　流翠
高砂の住居ふりあり桃の家　同　一萬堂　一衛
蝶一つ出きらひの眼にさわりけり　同　千本園　花門
二つ三つ殘る茄子や秋の霜　同　眞一庵　其德
老知るも忘るゝも此櫻かな　同　松譽庵　壽霍
聲ほとの數とは見へす楊雲雀　同　其貫

暮てまて暫しは有ぬ雲の峯　浪花　芦夕庵　支仙
櫻にもひと闇出來て郭公　同　鼎車
月に消へ星にまきるゝ螢かな　同　巴
水にせぬ心遣ひや氷賣　同　東生庵　花濤
谷の梅山の櫻におくれけり　同　杉浦　嶺月
晝も星折ふし見へて秋の空　同　春月庵　撫山
行秋や田は事足りし水の音　同　永長堂　原水
木雫い鐘のひゝきか夜るの蟬　生野銀山　花節女
更行やきぬたの外に音もなし　阿波　社遊社
春の夜の星にも含む朧哉　堺　太田五儕堂　五仙
幾寐覺去ても夜長し宿の秋　備後　可祝庵　しゐと
懸取や伏見竹田の夜の雪　同　三遲

春たのしく梅桃櫻咲く　同　蛙足
時雨るゝや垣の糸瓜の取殘し　同　整三
古郷にかへるさまなり落し水　同　可旭
京坂を滝車に過る風薫る窓やけしきの幾かはる　同　倚石
乙鳥に笑はれやせん草枕　同　掌山
これ程か皆若水か琵琶の湖　同　喜水

○

文臺に懐紙の雲や月の宴　芦の丸家　貞英
見るものゝおきを冬野の詠め哉　敲雪庵　梅門
涼しさや見上る不二は限りなし　三聖館　素香
花に出た人のたまるや夕渉し　扶桑庵　貫山
幹撫て松に物言ふ月夜かな　不斷庵　無腸

四季戀の部

飛乘りに結ふゑにしや放生會　米中
見返れはゝぬ〳〵まねく柳哉　宜遊
嫁に行く門へ傾く日傘哉　不角
來ぬ人を水鷄に佗る裏戸哉　鶴處
月の字の返事に涼し夕心　其濤
咀は仮初めならぬ雜こ寐哉　聽水
殘月や盡ぬ口舌を明早き　其逸
待程もなき夜うらめし夏の月　芦丸
蚊帳越しに眠たるき物よ對枕　翠竹
錦木の主しや悲しゝ大三十日　海右
忍ふ夜にふいと見出しぬ初螢　南齡

花の香や猫を尋る御粧ひ　竹窓
傾城の誠すゝしき團扇かな　不乙
短夜も待夜は長き思ひかな　稻處
待宵や心に錠のおりぬ空　昇甫
朧夜に怪し廊下を忍ひ足　流美
山吹の蔭や首尾待つ忍ひ咳　芦江
松虫や羽折を着せて置行燈　風虎
待人のおそし身に入む雨の音　其兒
寐る氣てはなき手枕や朧月　照海
憎からぬ膝を枕や春の雨　梅賀
答るや一人寐よとの鐘らしき　雅友
羅やいすかの首尾に茶碗酒　五醉

逢ぬ夜の夢歟遠音の郭公　文鳳
三符に待身や啼やみし虫に耳　瓢也
駕二挺戀の旅路や春の風　梅秀
羅や四十島田の薄化粧　英風
今日に干す身の濡衣や鍋祭り　夕映
宵不知やわつかあ間とさゝめこと　荷村
來ぬ人を待夜は長き蚊遣哉　扑津
錦木や綾なき間を梅の花　竹圃
ひぬ〳〵に引裂く秋の扇かな　李瓶
七夕や長い縁にしの願ひ糸　可詳
忍はすはしらす三夜の冬の月　崔夫
御簾越や螢に覗く君の顔　芳里

花はめる眼元は妹に通ひけり　泥水
寢もやらて待に難面し郭公　蟻道
ひぬ〳〵や朝顔垣のうら表　晴月
朧夜や結ひし儘の髪便ひ　北秀
妹かりの厭ひもせぬや冬の風　賞月
雪の夜も解けぬ思ひを通ひけり　無逸
夏の虫島原の夜は更にけり　九花
涼風に吹れたてゝし亂れ髪　來燕
粥杖にうたるゝうちろ人は花　花航
〳〵出した蚊を連れ込や忍ひ窓　柳花
うつり香の昔し忍はん菊襲　蒼露
摘込し千代の契りや若菜籠　如葉

五色紙秋の初めのしのふ摺　陸香
戀風も吹や納涼の灯おし船　一香
立聞の顔照らし行螢かな　五仙
忍ふ夜の袖にも露の重みかな　桃雨
羅や恥しからぬ岩田帶　蘆月
廊の花暮を夜明の心かな　公年
雪礫うてゝ刎橋おろしけり　烏秋
待戀に明て恥かし水鷄の戸　春光
竹と寐たきぬ〳〵涼し起こゝろ　清風
比ぬ〳〵やふりかへり見る朝の月　素月
弥持て出つる戸口の柳かな　行舟
皆扇うしろへ差や女房連れ　松翠

うつり香の袖は拂はし夜の雪　春芳
逢はぬ夜の裏町戻る寒かな　其洲
鴛鴦や水も洩さぬ池衾　流芳
名に薫る戀の街や鶏の巣　左牛
逢ふた夢さへ短夜の別れ哉　梅枝
待ち佗て幾夜寐さめや啼千鳥　松園
投込し弥も香のあり梅の花　贅石
とけ合ふて涼し雪解の麓川　東山
襟元に散る花寒し忍ふ宵　隹友
さゝ蟹のいと細りけり秋の暮　巴
夏痩も竹に結ひし紙の咎　竹延
夜櫻や禿の肩を杖はしら　楳溪

爰迄の雪は苦もあしさらは垣　三千雄
約そくの妻戸探るや梅明り　勝人
かゝけても長し待夜の行燈の灯　鼎池
玉ほこの道も習ふや五月闇　東屋
手折たる移り香床し夜るの花　卓志
丹せんや高雄か部家の飾り夜具　二柳
露寒しきぬ〳〵うとふ鶏の聲　静巴
紅筆の呼遣ひあと夜の花　鶴畝
立櫂は戀の雛やおほろ月　千司
媚きし聲に覗くや花の幕　其遊
釣初めた軒に寐過すふたり哉　北叟
羅や如何ある人の閨の花　鼎雫

鴛鴦の情はゑらすとかれ鹿　無興
逢ひたさの人を小招く團扇哉　香蘭堂
立忍ふ軒にうるさし蚊の呻り　鳳尾
艸原來てもゐる螢や妹か門　海右
はつ戀のいはぬは言に増りけり　春律
狸寐や巨燵を戀のかくれ簑　會象
櫛卷の髪のほつれや夕納涼　曉鳥
是てこそ戀の誠や雪の道　茶屋
鬼灯や音にまきらす鼠啼　友丸
さゝやかし聲のこもるや玉子酒　眉英
相打の碪に浮名立にけり　梅庭
戀艸の花もすかけりよし屏風　梅風

見ぬ振りをして花覗く娘哉　無曲
麗はしき化粧の不二やけさの春　竹翠
絹帽に洩るゝ匂ひや新枕　此屋
花あらぬうつり香もあり春の人　如水
戀に打音や砧の中休み　此友
明易したまに逢ふ夜は殊更に　竹庵
水鶏とは知らす明たる戸口哉　貴山
夕顔や祝ふて逃す袖の蜘　花集
振袖の娘眼立や花の中　可静
君を待夜半の栞りや鴈の聲　柳溪
椎茸に似た髪もかし花の中　半眠
さむしろに待夜は廣し虫の聲　照里

薫り持團扇の風や夕化粧　不聞
柳まて付て來にけり廊女　幸朝
此雪にかへすも啌の誠かな　眉八
鴉さへ今朝はまたれて廓の春　柳圃
帽の裾戀の白涙くゝりけり　一閑
仇戀のおもひ茶褐散るもみち哉　荷居
夏痩や藥にきかぬ物おもひ　松溪
礫かと首尾聞まよふ霰哉　鼎軍
月の雲忍ふ夜の首尾深めけり　一兆
吉原の二上りふけて初かはつ　黒坊
袖垣に忍ふさまあり初胡蝶　酔花
いたつらに待夜のしろや竹婦人　蒔生

垣間見の袖や氷柱の一雫　不乙

○寄瓜戀

冷添へて見ても西瓜のよそゝし　似水

鰒好と終にはなまぬ坊主落　窓雨

振り袖の匂ひこぼれて冬の春　鹿人

夢にもとかへす衣や雪の夜半　無腸

すれ合ふも媚くやうそ月の雲　安人

鶯のたれおろす別れや朝櫻　炉好

翠簾のひまもる戀風や月の宴　炉峯

佐遊流夜耶彼底鶯聲　貞英

明治二十年四月二十一日御届
同　年五月　刻成

定價金三拾錢

編輯兼出版人　大坂府平民　梅村彦七　南區鱣谷中之町四十六番地
賣弘所　同　山本勘助　東區博勞町三丁目三十六番地
同　同　山本與助　東區今橋壹丁目十四番地